



Ph. D. 取得時に研究室のみんなと
(前列中央が Zena Werb、その右が筆者) (1984年)

ファーマティブ・アクション^(注)が盛んな時期だったので、助教採用時点では、時に実力に比べても女性が有利なことがあった。しかし、そこから上は女性が少なかった。将来像を示す手本が必要だと言われていた。また男性には「OB網」があり、目に見えない恩恵を蒙っていると言われていた。そこで、米国細胞生物学会(ASCB)では、女性の若手指導者を中心になって、「OB網」に対抗して、キャリアを進めるためのハウツー講座のようなもの(WICB: Women in Cell Biology)を主催していた。女性はシンポジウムなどで発表する機会も少なく、女性の発表者を入れさせるとい

運動にも取り組んでいた。また女性研究者のために、WICB内に表彰制度を創設し、履歴書に書ける受賞経歴を増やして女性をサポートした。WICBは今ではASCBの重要な公式の活動のひとつになっている。Zenaより一〇年若い世代になると、優秀であればかなり道が開けた。Suzanne PfefferはUCSFでPh. D. 取得後スタンフォード大に移り、比較的若いうちに女性初の生化学部長になった。彼女のキャリアの早い時期に女性のハンデが緩和されたため、昇進が早く上の世代を追い越した面もある。しかし、下の世代の女性が認められることで上の世代への波及効果もあった。D. BantonはZenaよりさらに一〇年以上で、UCSFで血液学と電子顕微鏡の限られた領域で一部の関係者からは高く評価されて研究を続けてきたが、五〇代半ばで病理学部長に抜擢され、現在はUCSFの副学長をしている。穏やかな人柄で、学部長になった時に女性も含めて周囲がびくびくしたくらいである。

アメリカの女性研究者は恵まれた環境にいたことは間違いないが、非常にがんばりつてもいた。UCSFのキャンパスでは女性研究者の出産もあったが、出産の前後もあまり休まず、また全般に自宅の掃除のようなことは家政婦さんを頼んで軽減化を図るのが普通であった。

帰国後

さて、私は留学して五年目、Ph. D. になった。博士論文の内容をASCBのポスターで発表した時、ノーベル賞学者のGeorge Paladeが見に来て「面白い」とほめてくれたのが、記念の思い出である。帰国後はJohn Heuserと共にQFDE法を発展させた廣川信隆先生(東大医学部)の指導の下で細胞生物学の研究を続けた。東大医学部の助手を二年つとめた後、虎の門病院にある財冲中記念成人病研究所に移った。電子顕微鏡以外にも手法を広げながら、神経の細胞骨格、軸索輸送のモーター分子などを研究している。また、東大医学部の非常勤講師として「組織学」を担当している。廣川研究室は世界一流の研究室で、中国、韓国から多くの留学生、ヨーロッパからはポストドクが来ている。かつてASCBは小さな学会であったが、周辺分野を取り込んで発展し、巨大な学会になった。分子生物学も盛んで、UCSF、ASCBの人材は政府の諮問委員会やバイオ産業でも広く活躍している。Suzanneは昨年ASCBの会長、Zenaが来年の会長である。

細々とはあるが研究を続けられてきたのは周囲のおかげであると思っている。チャンスを与えてくださった石坂財団に心から感謝を申しあげたい。

(注)アファーマティブ・アクション：少数民族や女性の社会的地位の向上のために雇用・教育に関わる積極的な優遇措置をとること

生命科学で活躍する

女性研究者たち

国際文化教育交流財団第四回生（一九七九年度）
一九七七年東京大学薬学部卒業。同大学院修士課程修了後、七九〜八四年米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）大学院博士課程に留学。八四年六月Ph.D.。東京大学医学部解剖学教室助手を経て八六年より冲中記念成人病研究所研究員。専門は細胞生物学。

UCSFへの留学

今から二五年前、私は石坂財団の奨学生として、カリフォルニア大学のサンフランシスコ校（通称UCSF）に留学し、Ph.D.を取得するまで五年間を過ごした。その頃アメリカでは、生命科学の分野で女性の研究者が目に見えて増加した時期であった。

私はマクロファージ細胞の抗腫瘍活性について研究していたが、UCSFのZena Werbに連絡してみた。幸いにも実験病理学の博士課程に入学すれば彼女の研究室で研究できる旨の手紙をもらったので早速応募したところ、採用となった。UCSFは医薬系だけの学部からなる規模の小さなキャンパスで、自由な雰囲気活気があり、誰もが近いうちにこのキャンパスからノー

竹村玲子

たけむら れいこ

冲中記念成人病研究所研究室長



ベル賞が出ると言っていた。Zenaは助教授になったばかりで、私は彼女の二人目の大学院生であった。

留学途中から、私は細胞生物学へと転換していった。細胞生物学は細胞内の細胞骨格や膜小器官がどのように機能しているか、形態的な手法や生化学的な手法を総合的に取り入れて解明していく分野である。その頃アメリカの細胞生物学は発展期で、UCSFは主要な拠点のひとつであった。UCSFではJohn Heuserによって急速凍結デンプエッチ（QFDE）法という電子顕微鏡の技法が開発され、細胞内の構造を数ナノメートル（nm）の解像度（nm²＝100万分の1mm²）で立体的に観察することができ、大変な注目を浴びていた。私はマクロファージをこの手法で研究したが、この技法を

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三〇カ国の大学・大学院へ一五四名の日本人留學生を派遣するとともに、世界三五カ国四二九名の外国人留學生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

学ぶ機会を得たことは非常に幸運であった。誰も見たことのない生体内の微細構造の世界を探索する感動を言葉でうまく表すことは難しい。実験系は研究費の確保が大変であり、体力的にもきついのが、真理を自分の手で確かめることのできるぜいたくな職業であると思う。

女性の進出状況など

アメリカでは女性であることをあまり意識せずに研究に打ち込めたことがあった。当時、Zenaの研究室のあった建物には五〜六の研究グループが入っていたが、その中で女性の研究室リーダーはZena一人で、彼女が一番若かった。しかし、テクニシャンまで含めると女性の方が人数が多かった。そのため途中から建物内の男性専用のトイレを廃止して共用にすることになり、年配の男の先生方が嘆いていた。

生命科学分野全体で、Zenaのように若い世代には女性の研究者が増えていた。UCSFの博士課程の大学院生やポスドクでは女性が半分近くを占めていた。さらにア